

令和2年2月11日

白木賢信（常葉大学）

I 調査結果の概要

1. 利用団体のプロフィール（利用団体の種類・利用団体の主たる年齢層）については、小学校相当が殆どを占めつつある。例えば、「小学校」では、1～3年目は20%台、4～7年目は30%台で推移しているが、8年目で40%台、9～10年目で50%台に達し、11年目以降は60%台に達している。
2. 利用目標の種類について、「自主性や協調性、社会性を身につける」は12年間を通じて常に最も比率の高い項目である。4年目以降は60%以上の比率で推移し、特に9年目と12年目は70%台に達している。次いで比率の高い項目については、6年目以降は「自然に対して興味・関心を持つようになる」が10%台で推移している。
3. 利用後の参加者の変容について、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」の比率は、4年目までは30%台、5～11年目は40%台で推移し、12年目で50%に達しており、12年間で18ポイント上昇している。「周りの人に優しく接するようになった」も同じような推移の仕方をしており、12年間で12ポイント高くなっている。「自然を大切にできるようになった」は10～20%台での推移であるが、12年間で12ポイント高まっている。一方、「スポーツなど積極的に体を動かすようになった」の比率は、12年間で12ポイント低下している。
4. 繰り返し利用することによって予想される変容について、調査が行われた11年間とも「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」の上位3項目は変わらない。特に、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」の8年目以降は、60%以上を保ち、かつ第1位の比率である。「時間を守るようになる」は、11年目までは50%前後で推移していたところ、12年目で60%に達している。一方「スポーツなど積極的に体を動かすようになる」は、4年目までは20%前後、5～8年目は10%台で推移していたが、12年目は5%まで落ち込んでおり、2年目から14ポイント低下している。

II 調査の概要

1. 目的

本調査の目的は、静岡県立朝霧野外活動センター（以下、センターと呼ぶ）利用団体のセンター利用による教育的効果の一端を明らかにすることである。それにより、施設の評価は利用者数の増減に頼るところが大きい中、それ以外の評価指標としての基礎資料を提示する。あわせて、平成19～30年度の12年間における経年変化の傾向も提示することにした。

2. 内容

上述の目的を達成するために、センター利用による教育的効果に関する調査を行うが、その内容は以下の通りである。

- (1) 利用団体の種類
- (2) 利用団体の主たる年齢層
- (3) 利用宿泊数
- (4) 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）
- (5) 利用目標の達成度
- (6) 利用後の参加者の変容
- (7) 繰り返し利用することによって予想される変容

3. 対象

平成30年度のセンター利用団体

4. 方法

質問紙による配付回収法で、具体的な手順は次の通り。

- (1) センター担当職員が、各利用団体担当者に、利用期間中にアンケート形式の質問紙を配付する。
- (2) 各利用団体担当者は、センター利用後約1ヶ月の間に質問紙に回答し、回答済の質問紙をファックスでセンター宛に返送する。

5. 調査票（質問紙）の回収状況

回収数（率） 105（15%） 有効回収率 105（15%）

なお、ここで算出した回収率・有効回収率は、平成30年度における統計上のセンター利用団体数（703団体）を母数としている。

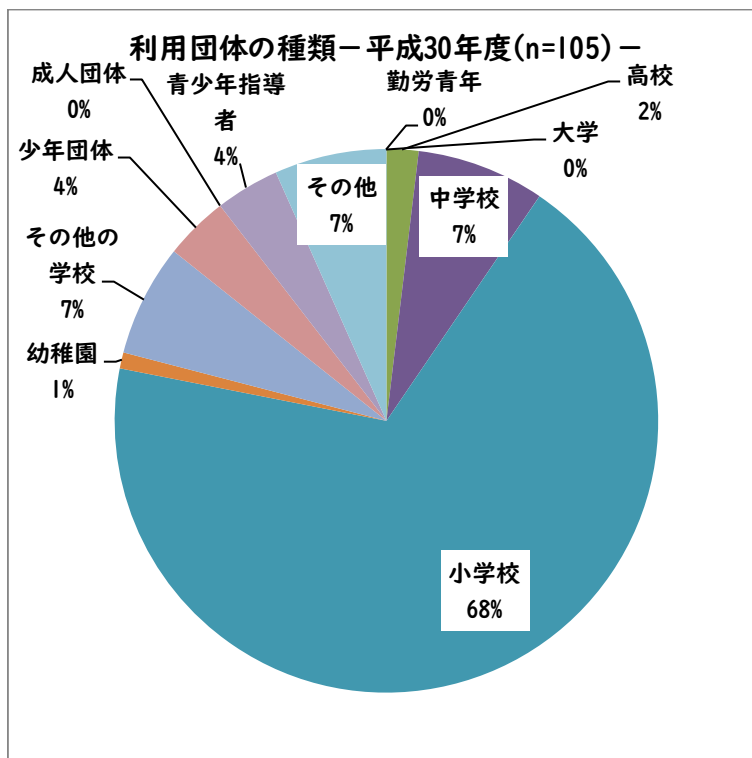
6. 実施期間

平成30年4月～平成31年3月

Ⅲ 調査の結果

1. 利用団体のプロフィール

最初に、本調査の対象となった利用団体のプロフィールについて述べることにしよう。まず、利用団体の種類についてであるが（図1）、最も比率が高いのは「小学校」（68%）で、次いで「中学校」「その他の学校」「その他」（7%）が続いている。なお、学校関係は全体の約85%を占めている。



「その他」の内訳

NPO法人，行政機関，スポーツクラブ，特別支援学校，任意団体，ボーイスカウト，（無記入）

図1 利用団体の種類

この利用団体の種類の12年間の変化について示したものが図2である。これによると、「小学校」は、1～3年目は20%台、4～7年目は30%台で推移しているが、8年目で40%台、9～10年目で50%台に達し、11年目以降は60%台に達している。一方「少年団体」は、8年目までは概ね20%前後で推移しているが、9年目以降は20%を下回り、特に10年目と12年目は1ケタ台の比率である。「中学校」も同様の傾向で、1～7年目は10%台、8年目以降は1ケタ台の比率で推移している。

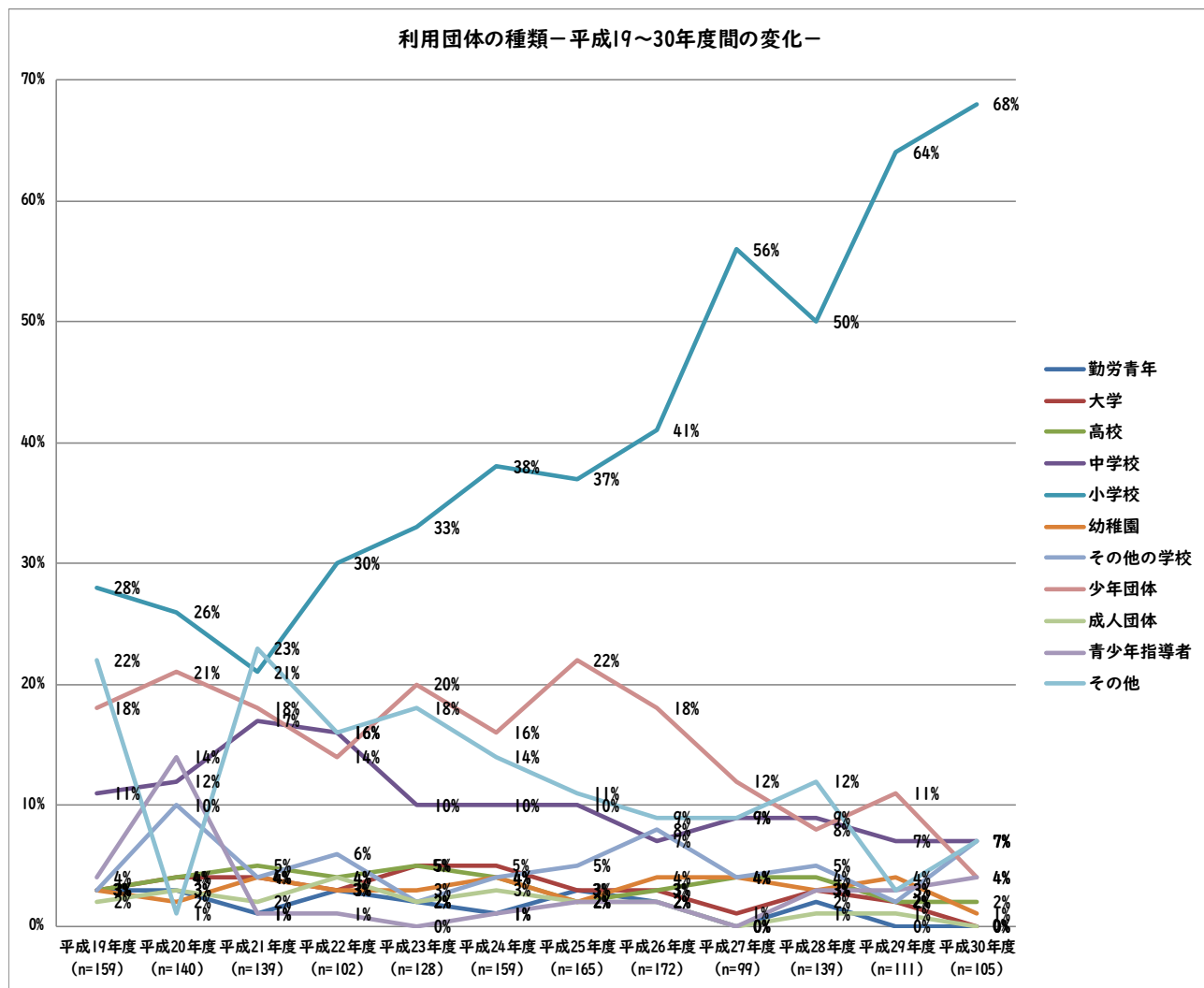


図2 利用団体の種類－平成19～30年度間の変化－

次に、利用団体の主たる年齢層について（図3）、最も比率の高いのは「7～12歳」（80％）で、次いで高いのは「13～18歳」（14％）で、両者で全体の9割以上を占めている。

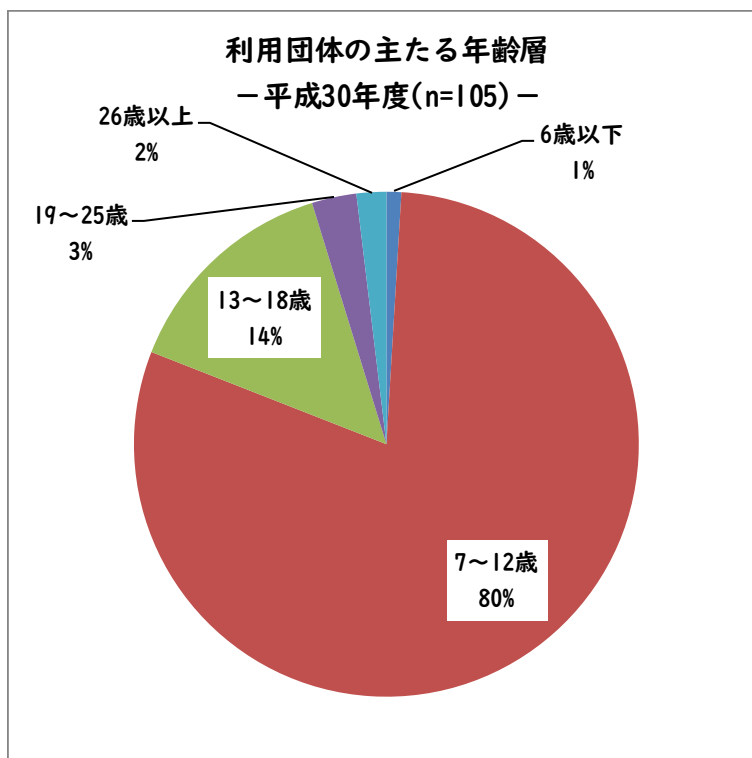


図3 利用団体の主たる年齢層

この利用団体の主たる年齢層を12年間の変化でみると（図4）、「7～12歳」は、4年目までは50%前後で推移し、5年目以降は60%を超え、11年目以降は約8割に達している。一方、「13～18歳」は、5年目までは20%台、6年目以降は10%台後半で推移しているが、11年目は12%までに落ち込んでいる。なお、その他のカテゴリーは、概ね1ケタ台の比率で推移している。

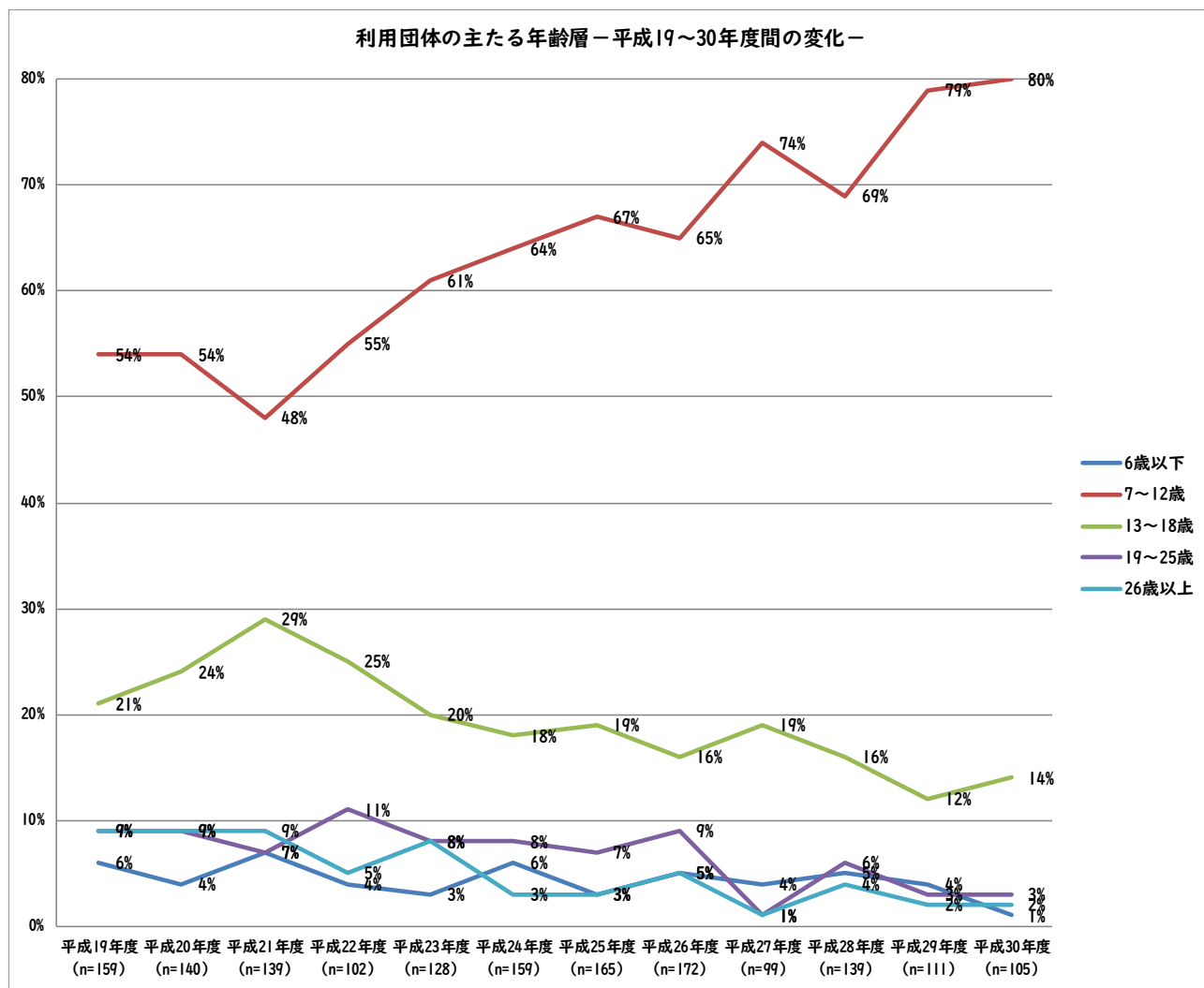


図4 利用団体の主たる年齢層－平成19～30年度間の変化－

さらに利用宿泊数については（図5）、「2泊」の比率が最も高く（53%）、次いで高いのは「1泊」（46%）である。なお、両者でほぼ全体を占めている。

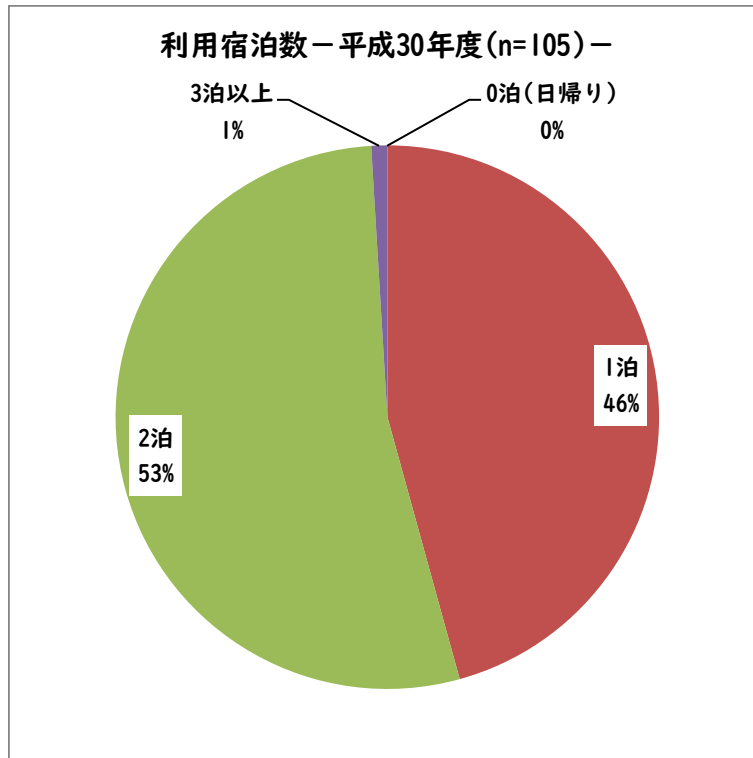


図5 利用宿泊数

この利用宿泊数を12年間の変化でみると（図6）、8年目までは「1泊」が最も高い比率で、9年目以降は「2泊」が最も高くなっている。

なお、「1泊」と「2泊」の全体における占有率は、2年目までは7割台、3～6年目は8割台、7年目以降は9割台で推移している。一方、「0泊（日帰り）」と「3泊以上」の占有率については、2年目までは2割を超えていたが、3～8年目は概ね1割台、9年目以降は1ケタ台の比率で推移している。

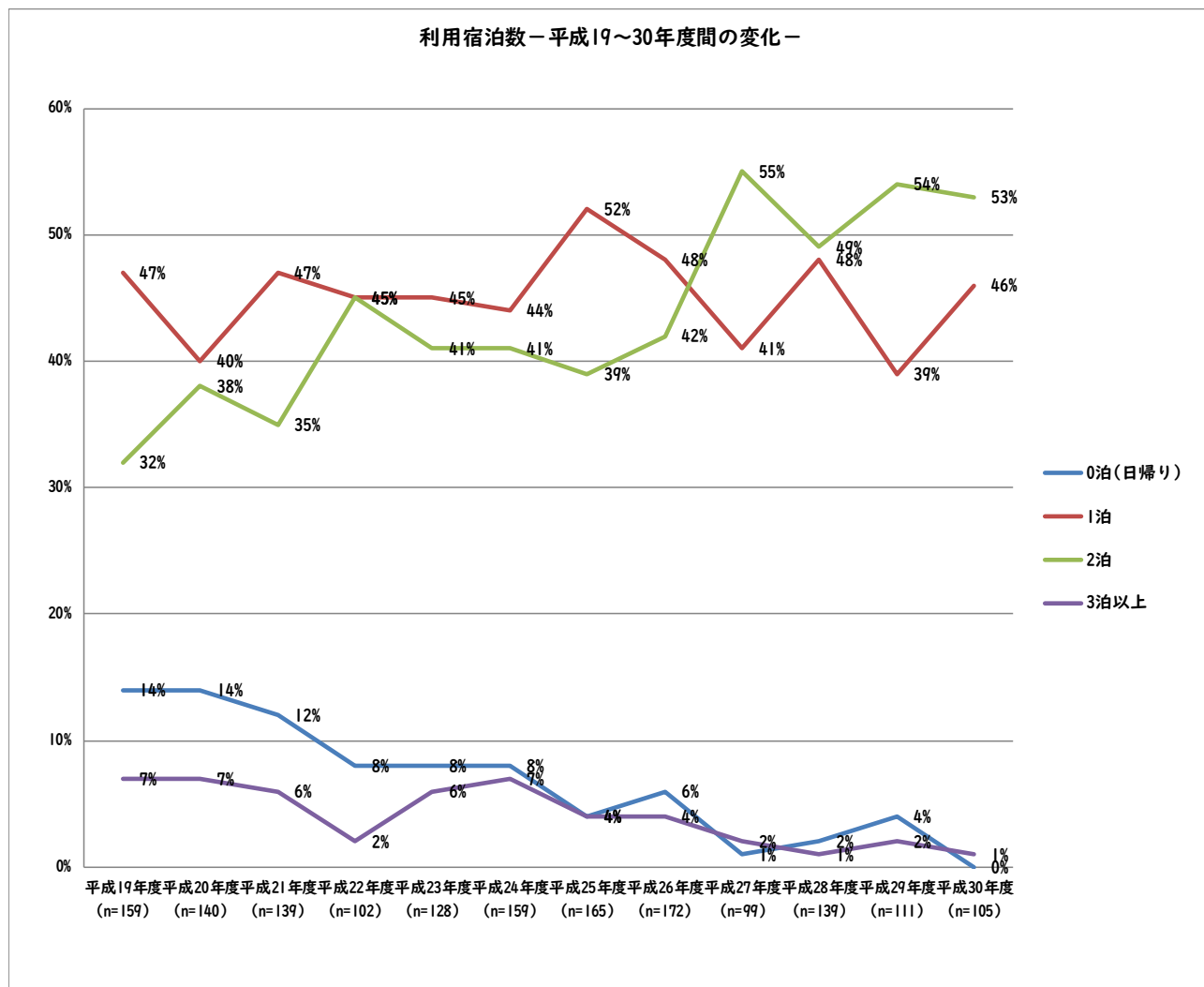
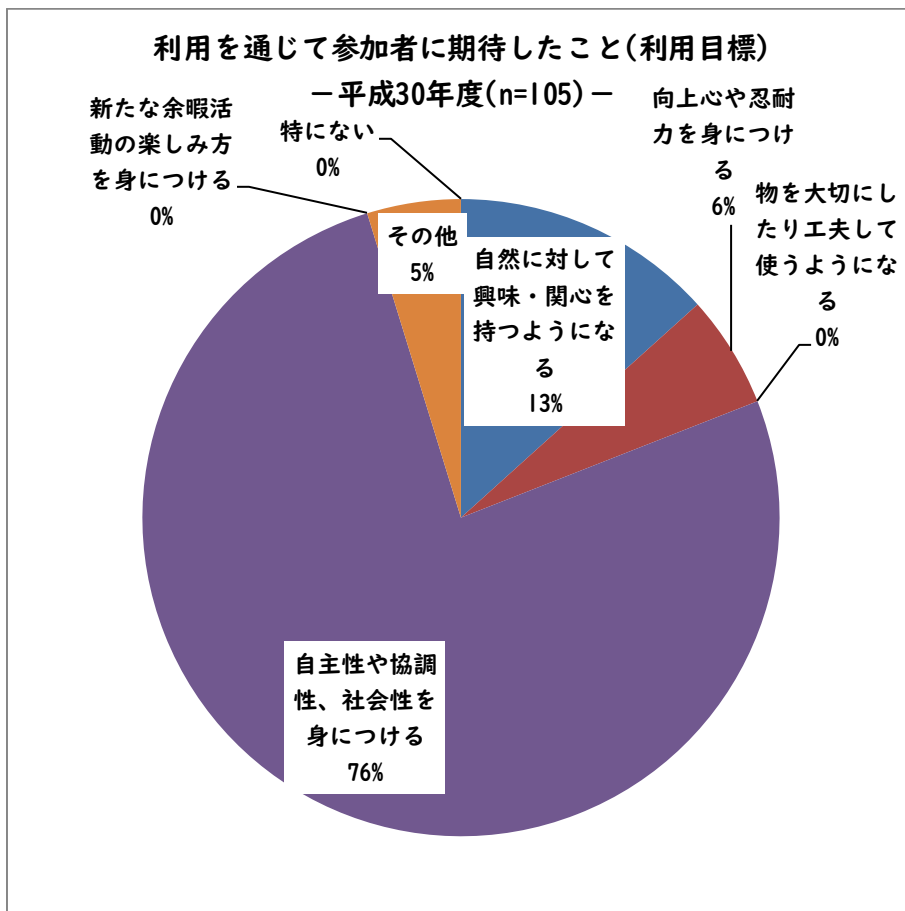


図6 利用宿泊数－平成19～30年度間の変化－

2. 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

ここでは、各団体が利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）（単数回答）を取り上げるが、ここでの項目は、青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議報告『青少年の野外教育の充実について』（平成8年7月24日）で挙げられている「野外教育の目標」および「野外教育に期待される成果」を参考にした（https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701b.htm、令和2年2月11日閲覧）。

図7で示されるように、最も比率の高い利用目標は「自主性や協調性、社会性を身につける」（76%）が全体の約3/4を占めていて、次いで「自然に対して興味・関心を持つようになる」（13%）、「向上心や忍耐力を身につける」（6%）が続いている。



「その他」の内訳

英語で生活してもらおう（活動を楽しみながら）、自己理解、他者理解を深め、豊かで安定した人間性を育む、新入職者の仲間づくり、仲間作り、友達の良い面を知る、ファイヤーセラピーの体験

図7 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

この利用目標の12年間の変化については（図8）、「自主性や協調性、社会性を身につける」は12年間を通じて常に最も比率の高い項目である。4年目以降は60%以上の比率で推移し、特に9年目と12年目は70%台に達している。次いで比率の高い項目については、6年目以降は「自然に対して興味・関心を持つようになる」が10%台で推移している。

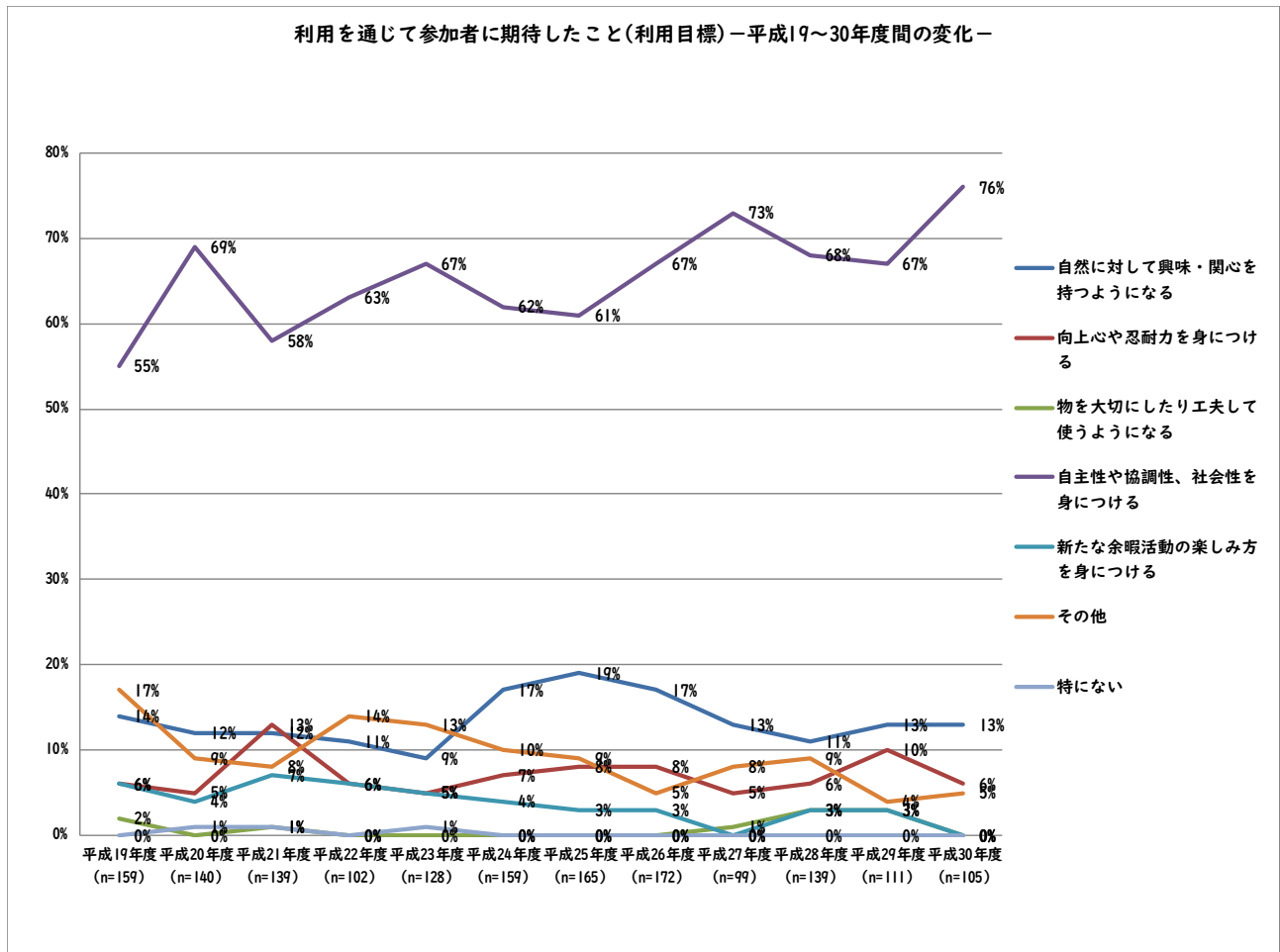


図8 利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）－平成19～30年度間の変化－

3. 利用目標の達成度

利用目標の達成度については、各利用団体が挙げた「利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）」について、今回の利用を通じて期待通り達成できたかどうかを、「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」「ほとんど期待通りできなかった」「まったく期待通りできなかった」の4段階のいずれかで各団体自身が判断している（回答者は利用団体担当者である。なお、回答者の選定は各団体の任意による）。

その結果、図9の通り、「だいたい期待通りできるようになった」の比率が最も高く（76%）、次いで高いのは「期待以上にできるようになった」の21%で、両者の合計がほぼ全体を占めている。

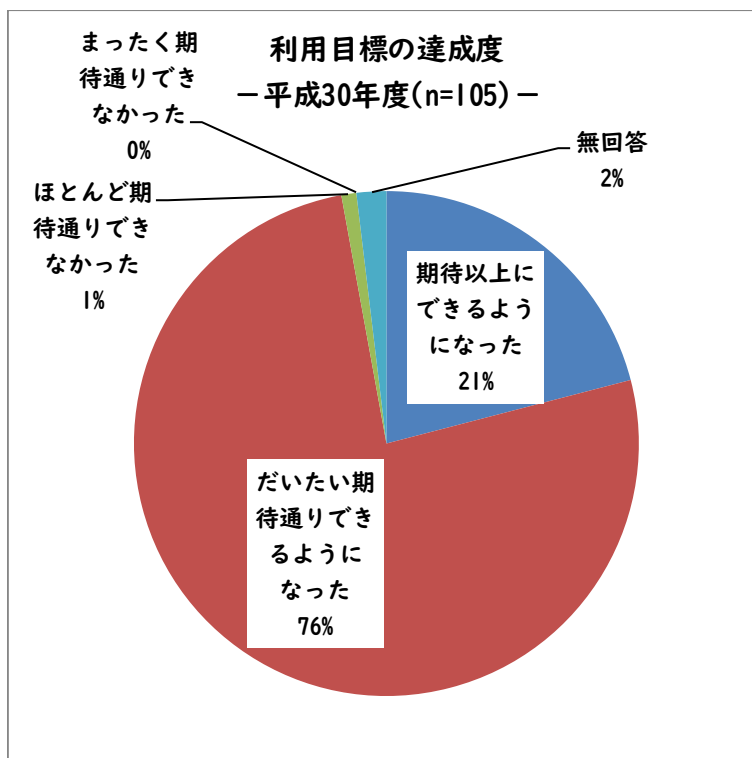


図9 利用目標の達成度

この達成度の12年間の変化については（図10）、「だいたい期待通りできるようになった」は12年間を通じて70%以上の比率である。「期待以上にできるようになった」は5年目までは10%台で推移していたが、特に9年目以降は20%台に達している。

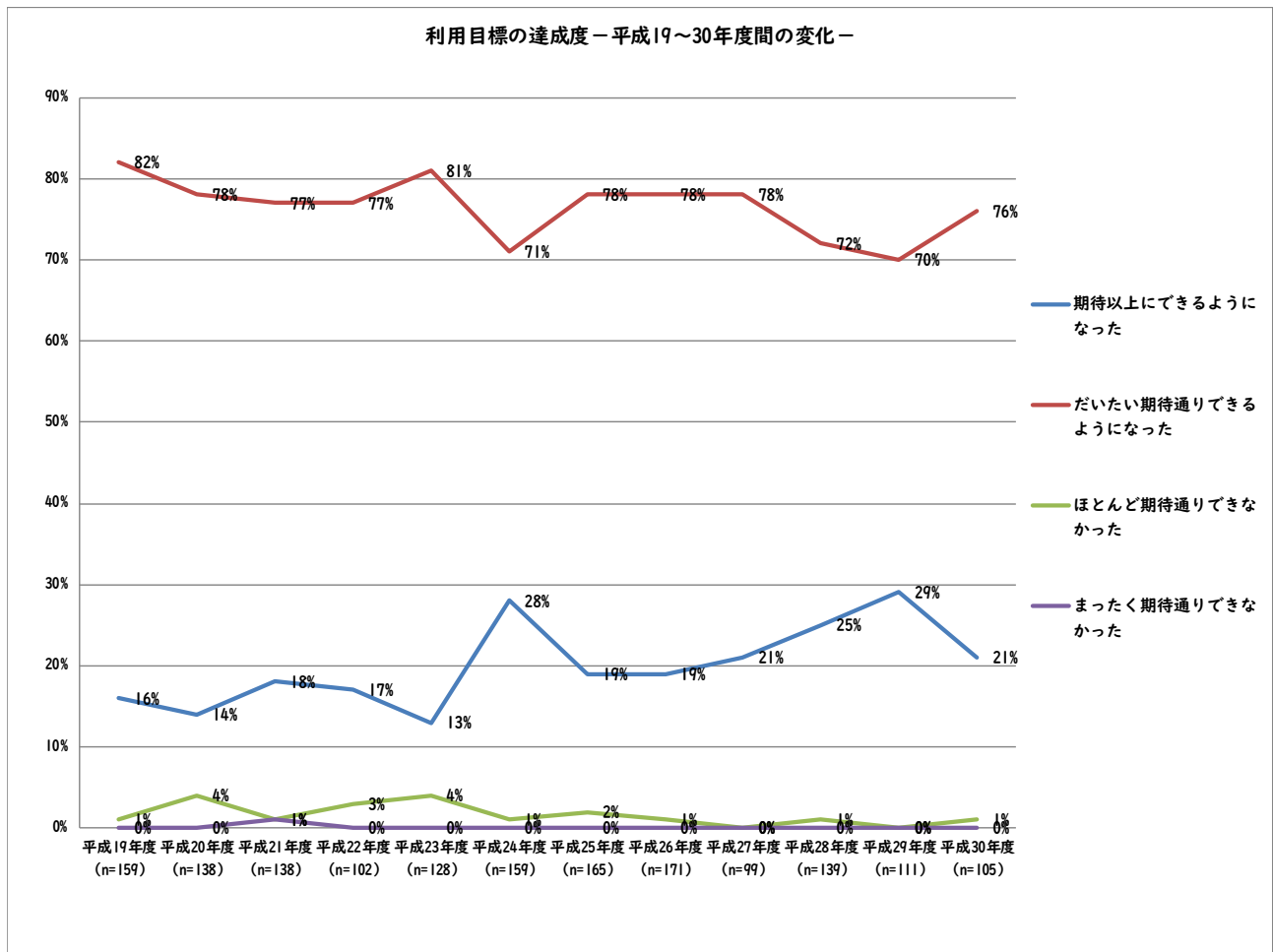
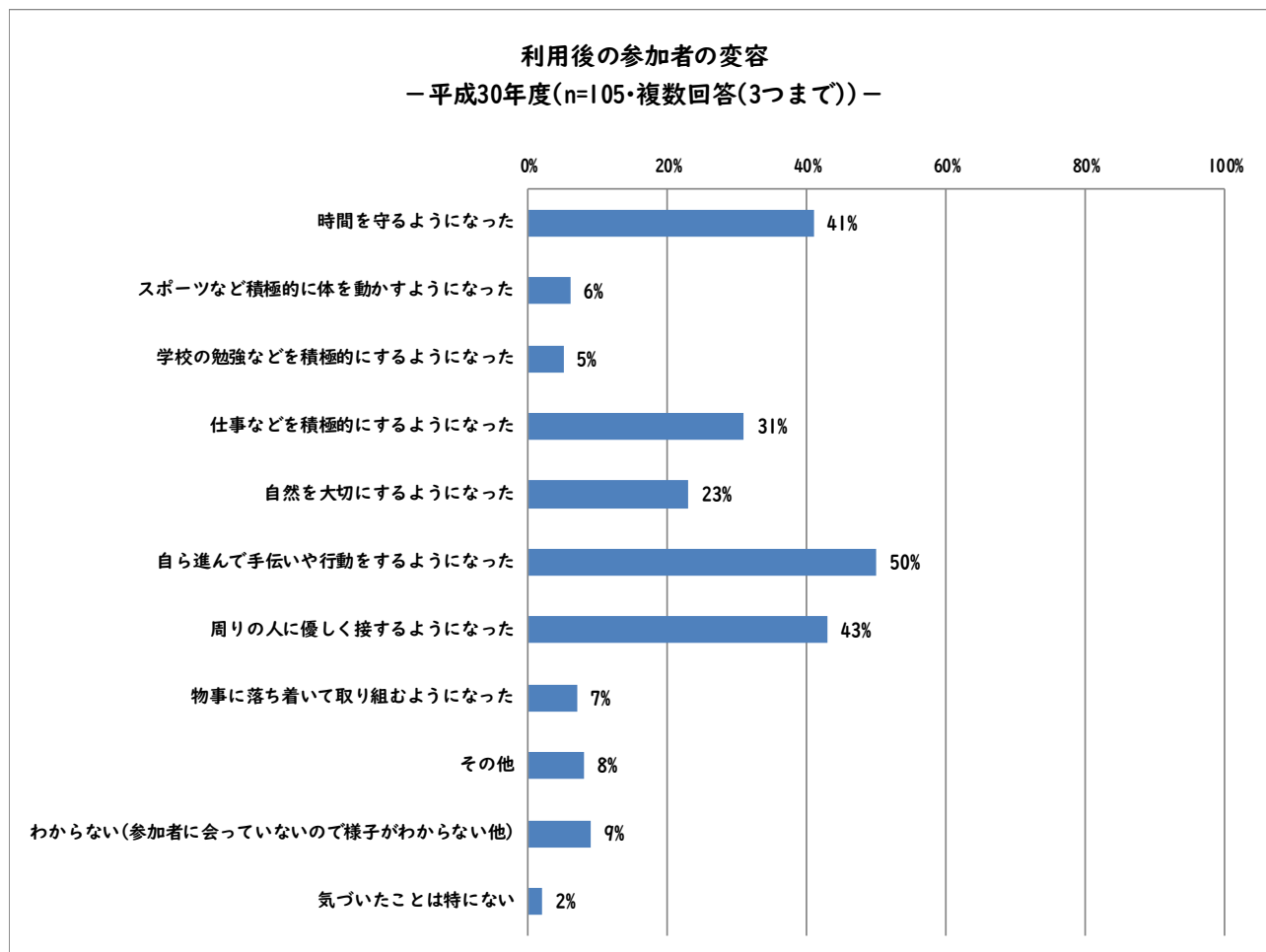


図10 利用目標の達成度－平成19～30年度間の変化－

4. 利用後の参加者の変容

利用後の参加者の変容については、利用後1ヶ月以内の変容について利用団体担当者が分かる範囲で捉えているが（複数回答・3つまで）、その結果は、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」の比率が最も高く（50%）、次いで「周りの人に優しく接するようになった」（43%）、「時間を守るようになった」（41%）の順に高くなっている（図11参照）。



「その他」の内訳

朝霧との違いを考えるようになった、結束力が強まった、自分たちで何とかしようと考え、力を合わせて工夫しようとするようになった、自分に自信が持てるようになった、友達と協力することができる場面が増えた、前よりも、自ら考えて行動するようになった、班で協力して、物事をやりとげられるようになった、普段話さない人とも話すようになった

図11 利用後の参加者の変容

この12年間の変化について（図12）、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」の比率は、4年目までは30%台、5～11年目は40%台で推移し、12年目で50%に達しており、12年間で18ポイント上昇している。「周りの人に優しく接するようになった」も同じような推移の仕方をしており、12年間で12ポイント高くなっている。「自然を大切にできるようになった」は10～20%台での推移であるが、12年間で12ポイント高まっている。一方、「スポーツなど積極的に体を動かすようになった」の比率は、12年間で12ポイント低下している。

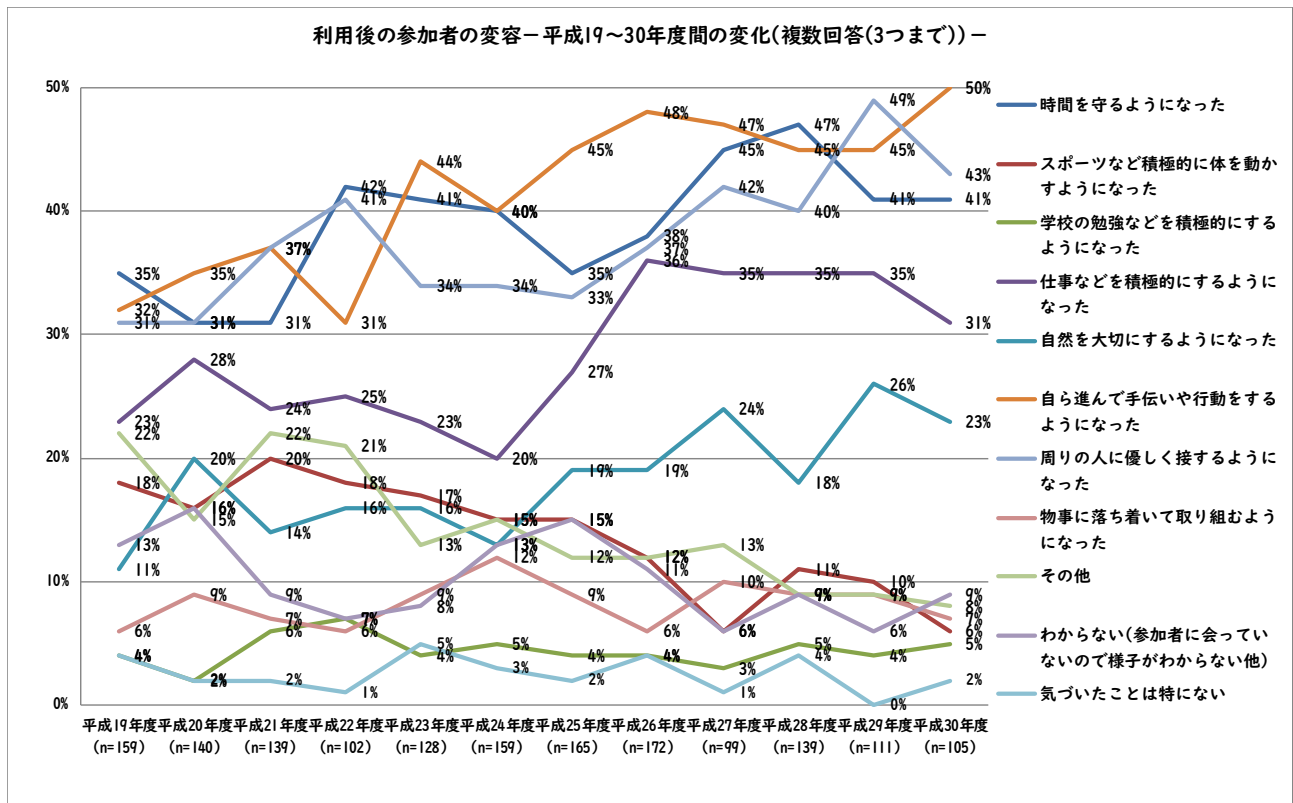
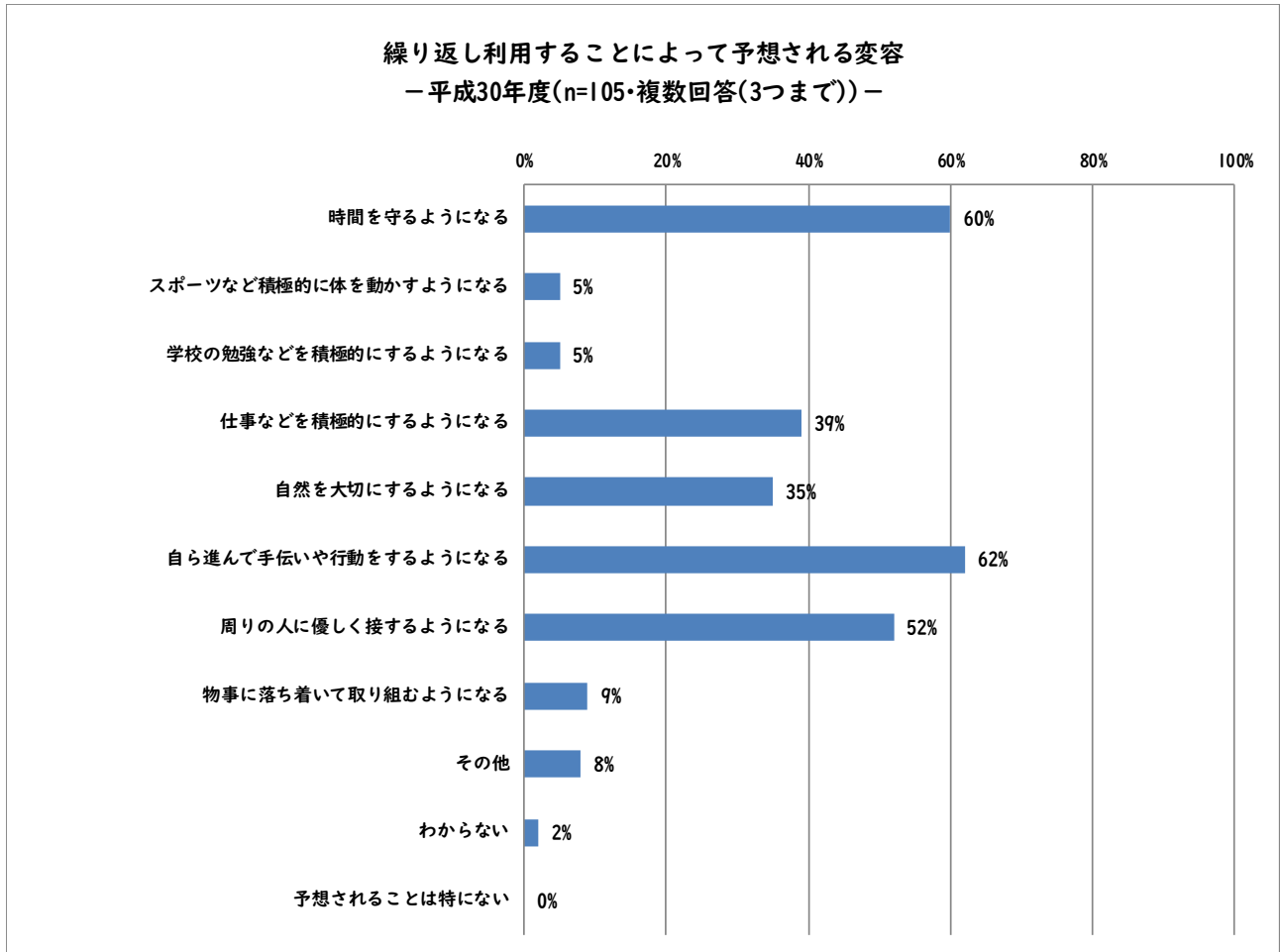


図12 利用後の参加者の変容－平成19～30年度間の変化－

5. 繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は、利用後の参加者の変容と同じ項目について、今回各団体がそれぞれ計画した活動を繰り返し実施することによって日常の参加者に現れると予想されるもので捉えている（複数回答・3つまで）。その結果、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」の比率が最も高く（62%）、次いで「時間を守るようになる」（60%）、「周りの人に優しく接するようになる」（52%）が続いている（図13参照）。



「その他」の内訳

同じくらいの学年の団体が一緒だと、同世代の者の存在意識が高まると考えられる（私学のため、他者の存在意識が低い児童が多い）、協力して、困難を乗り越えようとする、自主性、協調性が育つ、自分で気づき、考え、行動していく力、仲間と知恵を出しあって乗り切る力がついていく、友達と協力できる、どれが最適か考えられるようになる、人間関係の向上、物事の手順が分かり、身のまわりのことができるようになる、ゆずり合う、仲間と協力する、工夫する、観察する

図13 繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は2年目から加わった項目であるため、図14の通り11年間の変化を示すことになるが、それによると11年間通じて、「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」の上位3項目は変わらない。特に、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」の8年目以降は、60%以上を保ち、かつ第1位の比率である。「時間を守るようになる」は、11年目までは50%前後で推移していたところ、12年目で60%に達している。一方「スポーツなど積極的に体を動かすようになる」は、4年目までは20%前後、5～8年目は10%台で推移していたが、12年目は5%まで落ち込んでおり、2年目から14ポイント低下している。

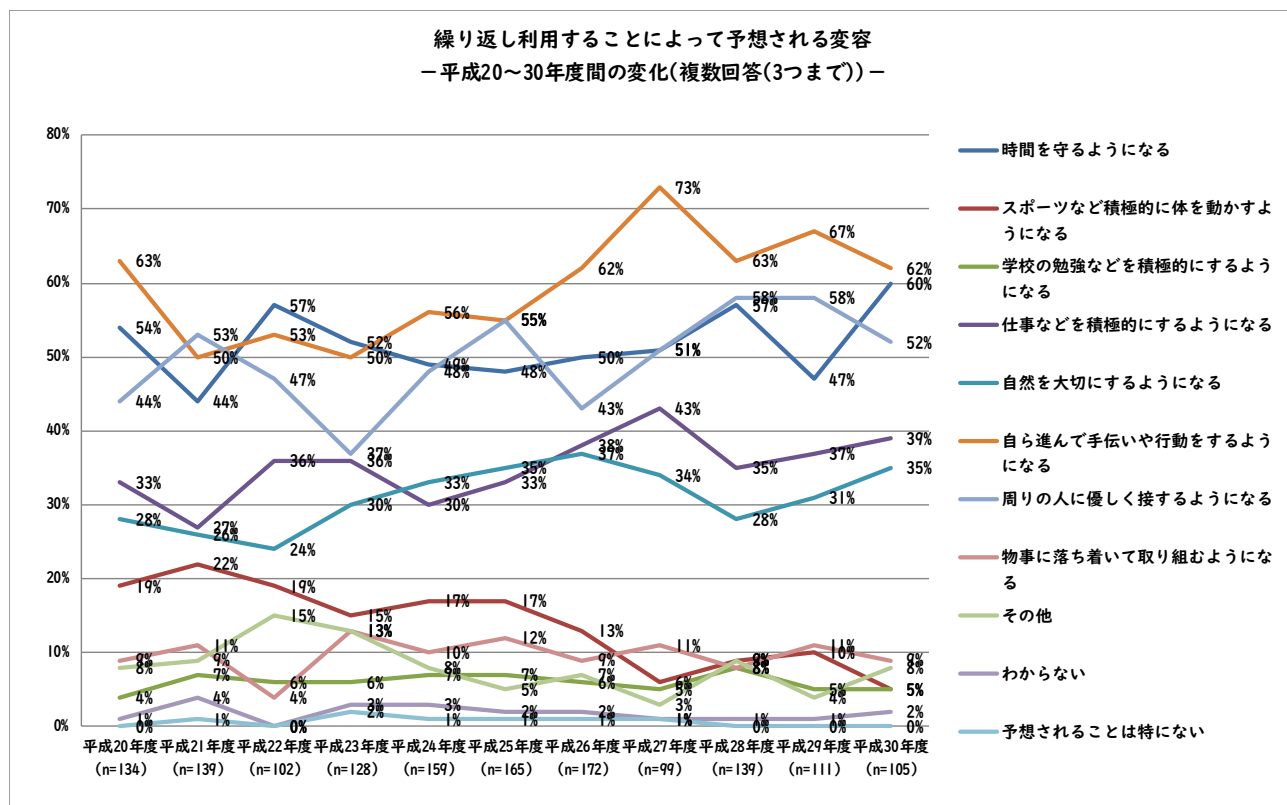


図14 繰り返し利用することによって予想される変容—平成20～30年度間の変化—

IV 調査結果のまとめと今後の課題

1. 調査結果のまとめ

- (1) 利用団体のプロフィール（利用団体の種類・利用団体の主たる年齢層）については、小学校相当が殆どを占めつつある。例えば、「小学校」では、1～3年目は20%台、4～7年目は30%台で推移しているが、8年目で40%台、9～10年目で50%台に達し、11年目以降は60%台に達している。
- (2) 利用目標の種類について、「自主性や協調性、社会性を身につける」は12年間を通じて常に最も比率の高い項目である。4年目以降は60%以上の比率で推移し、特に9年目と12年目は70%台に達している。次いで比率の高い項目については、6年目以降は「自然に対して興味・関心を持つようになる」が10%台で推移している。
- (3) 利用後の参加者の変容について、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」の比率は、4年目までは30%台、5～11年目は40%台で推移し、12年目で50%に達しており、12年間で18ポイント上昇している。「周りの人に優しく接するようになった」も同じような推移の仕方をしており、12年間で12ポイント高くなっている。「自然を大切にするようになった」は10～20%台での推移であるが、12年間で12ポイント高まっている。一方、「スポーツなど積極的に体を動かすようになった」の比率は、12年間で12ポイント低下している。
- (4) 繰り返し利用することによって予想される変容について、調査が行われた11年間とも「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」の上位3項目は変わらない。特に、「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」の8年目以降は、60%以上を保ち、かつ第1位の比率である。「時間を守るようになる」は、11年目までは50%前後で推移していたところ、12年目で60%に達している。一方「スポーツなど積極的に体を動かすようになる」は、4年目までは20%前後、5～8年目は10%台で推移していたが、12年目は5%まで落ち込んでおり、2年目から14ポイント低下している。

2. 今後の課題

本調査は回収サンプルの偏りがあるため即断できないが、12年間分の傾向を一応の仮説として捉え、今後検証していくことが期待される。そのポイントとして次の2点が挙げられる。

- (1) 12年間変わらない項目としては、利用目標の種類「自主性や協調性、社会性を身につける」が最も比率が高い。また利用目標に対する達成度については、「だいたい期待通りできるようになった」が常に70%以上で、「期待以上にできるようになった」は、9年目以降は20%台に達している。
- (2) 12年間で変化が見られる項目としては、利用後の参加者の変容では、上昇傾向の「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」と低下傾向の「スポーツなど積極的に体を動かすようになった」が挙げられる。繰り返し利用することによって予想される変容についても（11年間分）、上昇傾向の「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」と低下傾向の「スポーツなど積極的に体を動かすようになる」が挙げられる。